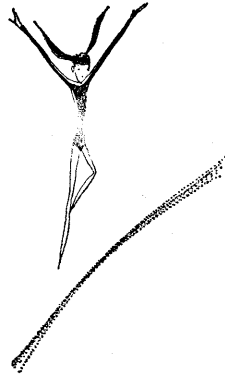


窓口すずめの思うこと

天川みな子



病院の薬剤師として六年も勤めていると色々な出来事に出会うものですし、それを通じて様々な人の姿、それも弱い立ち場に居る時、或いは可愛想な程取り乱している時の姿が見えて来る物です。勤め始めた頃は、何が何だか解らないまま毎日の仕事をこなすだけでしたが、少し自分に余裕が出て来ると、患者さん達と接触する機会

も増え、一人前の薬剤師と言うには、まだ勉強不足ですが、一人前の窓口すずめ位にはなれるのです。

病院に来る人は皆、病人ですが、そのうちの半分位の人々は、病気とは言えないのです。こういう風に表現すると少し問題があるかもしれませんが、つまり自分達で病気を創り出している人達がとても多いのです。広義の心身症の様なもので、症状はあるのに原因が見つからなかったり、子供の場合だと周囲の大人が病気を創り出している事が多く、医師でも、そういうプライベートな部分には立ち入り難いという訳で、とりあえず症状の軽減という事と考えて治療を進めるのですが、最近の若い母親には、私達でさえもあきれてしまう事が多くあります。

窓口からホールを見て思うのですが、小さい子供は、今も昔もあまり変りがありません。彼らは身体の具合をかけひき無しに身体で表現して来ますから、本当に具合の悪い子は、ぐったりしている事が多いですし、それ程は具合が悪くないのに無理に連れて来られた子は親の目を盗んではちょんちょこしているの、初めて見る子で

も、大体の様子が解るものです。問題を感じるのは、後者の子供を病院に連れて来た親の方です。「元気は良いけれど鼻が少し……。熱も今は無いけれど、出たら困るので薬を出して下さい。」勿論病院では診察しますし、希望通りに薬も出します。でも、本当にそれでいいのでしょうか……？

私達が子供の頃は、熱が出たら砂糖湯を飲んで、頭を冷して寝かしつけられ、少し元気になれば、とにかく何でもいから食べなさいと言われました。便秘の為に発熱して洗腸された事や、いつも母が傍に居て我儘を聞いてくれた憶えなどもあります。きっと母は最大の愛情を以て心配を隠し、おおらかに構えていたのだと思います。親が子を心配する心はいつの時代も変わらないと思いますが、今の若い母親は、即病院。即薬です。子供の自己回復力を忘れている様な気がしてなりません。母親のおおらかさが欠けているから子供の神経もピリピリして、喘息になったり、抵抗力の弱い子に育ってしまうのです。最近、少し話題になった「母原病」の始まりの一

端がこんな所にもあるのではないかと肌寒い思いがします。

小学校の中学年位になると子供の行動範囲が広がる為、時々、常識を疑いたくなる様な親子が出現します。例えば病院のホールで追いかけてごっこをしたり、サッカーまがいの事をしている子供がいます。さて母親は……と言えば、子供を叱る様子もなく、ホールのテレビを見ていたり、井戸端会議に熱中して、時々、子供に向けて形式だけ「こら、こら。」と声をかける位の人が多々です。周囲の人も「吾れ関せず。」という状態です。私がお思い余って注意をしに行くと、大抵は「ほら、怒られた。止めなさい。」と言い、自分のしている事に再び熱中する母親がほとんどで、あやまりの言葉を聞く事は、まずありません。ひどい時は「こっちにいらっしやい。」と子供を自分の方へ引き寄せて、注意した私を母親が睨みつける始末です。

核家族化が進み、自分中心の社会に暮らしている為でしょうが、実際、子供に接する時間は昔とそれ程差がな

い筈なのに、子供を見ていない親が多くなり、会話もスキミングも減少している様な気がします。これは、子供の病状を把握していない親が増えている事からも考えられる事です。

先日、二才位の子供が、背中全体を火膨れにして来ました。話によると、海で肌を焼きすぎた様なのです。小さい子供は遊ぶのが仕事ですから、遊び始めると我を忘れてしまうものです。大人に比べて肌も弱いし、体表面積も大きいのですから、これらの事を充分にふまえて、遊ばせる時間を考え、子供の状態をよく観察して、適した環境を作り考えてやらなければなりません。不幸中の幸いで、その子の火傷は、ひどいなりにも火膨れ程度で済んだから良かった様なものの、その為に脱水を起こせば、発熱したり死んでしまう事も充分有り得る事で、その可能性は大人のそれよりはるかに高いのですから、小さい子供程、親の管理の不行届が生命の危険につながるという事を、もっと感じて欲しいと思いました。

子供の管理がきちんとなされていないという事に関し

ては、七、八才になってもカプセルや錠剤の飲めない子供が多いという事からも推測されます。十才でも、かなりの人数です。これは、昔に比べて子供用の薬が普及して来た事も原因ですが、その年齢になっても錠剤を飲めない事をあたりまえだと思っている親が多いのには、大変、驚いてしまいます。

ところで、病院には色々な人が診察を受けに来ますが、或る日、胃の検査結果を聞きに来た患者さんには、分裂病で精神病院に入院した事があり、先生が検査結果の説明をしている時に発作を起こして、突然、叫び声をあげて暴れ、走り出したのです。待合席で診察を待つ人や、ホールで会計をしていた人々は、大パニック状態になりました。

この時、乳飲み子を連れて来ていた若い母親の中には、子供をそこに置いたまま逃げ出した人がいました。その子を抱えて恐怖の中から逃げ出したのは、隣りに座っていた見ず知らずの中年女性でした。後でその母親は中年女性から、ひどくお叱りを受けていたそうですが、

子供を危険から守る事さえ出来ない親が居るとい
は、同時代の私達としても、心の痛む思いがしたのを覚
えています。

また、今まで話して来た年代よりも少し高い年齢層の
話になってしまいますが、事故や病気で入院して来る中
学、高校生も複雑な家庭環境を持っている場合が割合に
多いのですが、この点に注目するべきだと思います。

脳腫瘍で入院したA君は、シンナーの吸いすぎで脳に
異常を来していました。脳腫瘍とシンナーのつながりは
私には良く解りませんが、彼は手術後の無意識の中で母
を呼び、そして夜通しその母に向かって「バカヤロー。コ
ノヤロー」と怒鳴り続けるのです。彼の生活環境がどう
であったか知りません。しかし、人の愛情やふれあいに
飢えていた様に私には感じられます。

オートバイ事故で入院したO君は母親が蒸発し、幼い
頃から父親と祖父母に育てられ、物心ついた頃には世間
で言う悪い仲間に入っていました。結局、彼はその事故
の後遺症の為に今も通院しているのですが、薬を取りに

来ては、窓口で私達に話しかけ、帰りたくなさそうに院
内を歩き廻っている事が多いのです。

彼らが道を間違えた原因の大きな要素のひとつに親と
のスキミングの不足があると思います。何故なら、彼
らは私達には人なつっこい笑顔で話しかけ、退院した後
も素直な人間として接しようとして努力しているのが良く分
るからです。彼らはいつても何かに飢えているのだと思
います。

現在、私の勤めている病院には、東京のベッドタウン
に有り、周囲には社宅やマンションがたくさん建ってい
ます。この辺は共稼ぎの夫婦はそれ程多くない様で、聞
く所によると、母親が家に居る家庭の多くは、昼食を子
供と一緒に喫茶店のランチ等、外で済ませてしまうのだ
そうです。おいしい物を食べるに行く事は、それなりに意
義のある事だと思えますが、ただ単に外食で簡単に済ま
すと言うのは、どうかと思います。

ついでに書き加えますが、女性の手間を省く為、色々
な冷凍食品やインスタント食品が普及した結果、それに

つれて子供の成人病的疾病が問題になりつつあります。現に私の勤める病院でも、この為かどうかはよく分りませんが、年寄りしか飲まない様な薬を持って帰る子供が数名います。

また、ここまで行かなくても、味音痴の子供が増えていくというのを聞きますが、これらの事は教育以前の問題の様に思えて仕方ありません。

子供は親を見て育つと言いますが、小さい子供は真白な吸い取り紙と同じで、周囲の色をどんどん吸収して行きます。窓口で「私の薬は遅くされている。」と怒鳴っている女性。バスの時間に間に合わないとか、出してくれと頼んだ薬が入っていないと言って感情的になっている母親。

女性ばかりではありません。専門医のいない日祭日に軽く怪我をした子を連れて来て「緊急だから」を連発し、専門医を呼び出して欲しいと騒ぎたてている父親。それぞれの人の気持ちは十分に理解できませんし、どうかしてあげたいと思われる人達もたくさん居ますが、ほ

とんどの人達は、自分の事だけ、自分の主張だけをぶつけて来るのです。そして、子供は親が何でも人のせいにして、自分の主張だけしているのを、じっと見て、吸収しているのです。だからこそ、私は本音で生きているのを見られても恥しくない生き方をしたいと思えますし、特に子供の父親と母親は、生き方や家庭の在り方、そして子供の育て方などに関しての共通した方向性をしっかりと持っていて欲しいと思います。

子供が、これからの世の中をより良く生きて行ける様に、親は子供が小さい頃に「お金では決して手に入れる事のできない大切な事」を十分に教え、与えてやるべきなのではないでしょうか。しかし、現代の物質優先傾向の社会では、それが少なくなりすぎている様な感じがします。それとも、私が大切だと思っている様な事は、必要でない世の中になって行くのかもしれないですが、もし、そうだとすれば、大変に恐い事で、考えただけで背筋が冷たくなってしまいます。

(新行徳病院、主任薬剤師)